

近代日本と大学野球

加 地 直 紀
大 島 義 晴

序 論

日本で野球は準国技と位置づけられる。準国技野球を近代日本においてリードしてきたのが大学野球、特に東京六大学野球、とりわけ早稲田・慶應義塾両大学野球部であり、早慶戦である。早慶戦は明治36(1903)年11月21日に始まり、40年後の昭和18(1943)年10月16日の出陣学徒壮行早慶野球戦、所謂最後の早慶戦をもって一旦幕を閉じる。したがって40年に及ぶ早慶戦を中心に検討すれば、近代日本における大学野球の実態を明らかにすることが出来る。

近代日本において野球をリードしてきた大学野球であるが、この半世紀、十分には研究されてこなかったようである。断片的に大学野球を取り上げる先行研究は少なからず存在するが¹⁾、大学野球を本格的に検討する研究は、これまで見当たらないようであった。しかし近年、山室寛之氏『野球と戦争 日本野球受難小史 (以下『野球と戦争』)』(中公新書、2010年6月)や中村哲也氏『学生野球憲章とは何か—自治から見る日本野球史— (以下『憲章』)』(青弓社、2010年8月)が上梓され、本格的な大学野球の研究が始まった。ただし前者は、後述する明治44(1911)年の野球害毒論を詳細に述べてはいるものの昭和期に焦点を当てており、後者は、大学野球草創期の明治20年代への言及があるものの主として大正期以降を検討し、また学生野球全般を扱っており大学野球に焦点を当てているわけでは

ない。

本稿では、第一に大正14(1925)年の東京六大学野球連盟結成前の大学野球草創期、第二に同連盟結成から昭和初年代の大学野球全盛期、第三に昭和12(1937)年に勃発した日中戦争後の戦時期における早慶戦を考察する。この考察により、近代日本における大学野球の意義を明らかにすることが、本稿の目的である。

なお本稿では、大正7(1918)年の大学令以前であっても、便宜上私立大学に対しても大学と表記する。大学野球部による野球を大学野球、中等学校あるいは高等学校野球部による野球を学生野球と記述する。野球観戦並びに応援の為観客席に訪れた集団を応援団、彼らを指導するものを大学応援団と記すこととする。また本稿では主として、中沢不二雄監修・浦岡緯太郎編集『球界一八十年の歩みー(以下『球界』)』(日刊スポーツ新聞社、昭和31年5月)、池井優『東京六大学野球外史(以下『外史』)』(ベースボール・マガジン社、1977年12月)、『激動の昭和スポーツ史⑥大学野球』(ベースボール・マガジン社、平成元年7月)、新宿区立新宿歴史博物館編『学生野球の昭和史 六大学野球の黄金時代(以下『黄金時代』)』(新宿区教育委員会発行)²⁾に基づいて記述する。

第1章 大学野球草創期における早慶戦

一般的に近代日本野球は明治初年に始まり、以後駒場農学校、第一高等中学校(以下後年の第一高等学校時代を含め一高)、明治学院、学習院、慶應義塾、早稲田等の並立時代、一高全盛時代、早慶時代、と分けられる³⁾。本章では大学野球草創期の早慶戦について述べるが、その前に第1回早慶戦に至る前史を概説する。

明治5(1872)年あるいは同6(1873)年⁴⁾、第一大学区第一番中学で、米国人教師ホーレス・ウィルソン(Horace Wilson 1843—1927)が同校生徒に野球を教えたのが日本における野球の始まりである。明治11(1878)年日本野球の父とされる平岡熙が新橋倶楽部アスレックスを結成したが、これが日本初の組織化されたチームといわれる。明治15(1882)年新橋倶楽部アスレックスと駒場農学校が対戦するが、これが日本初の対抗戦とされる。明治19(1886)年一高野球部が結成

されるが、依然として駒場農学校が強い状態であった。翌20年、新橋倶楽部アスレチックスが解散され、球界の中心は学生野球へと移る。明治29(1896)年、一高が横浜外国人チームに29対4で大勝利、一高の全盛時代となる。明治36(1903)年、官立一高への私学の対抗意識から第1回早慶戦が行われ⁵⁾、翌37年、一高が早慶両大学に連敗したことにより、球界の中心は早慶へと移り、早慶時代となる。明治37年は「わが球界に一大エポックを画した時代」⁶⁾と言われる所以である。

このように日本野球界の中心的存在となった第1回早慶戦について次に述べるが、まず早慶戦開催への経緯について述べよう。官立一高への私学の対抗意識を経緯とすると先に述べたが、これ以外にも、早慶両大学が一高に挑戦しても同校は練習試合としか応じない、一高のこうした態度は球界の為にならないとして早慶戦が開催されたとも言われている⁷⁾。

このように一高への対抗意識あるいは反発から開催された第1回早慶戦は後年、「意外にその頃の人気を煽つたのみならず、あらゆる方面に大きなセンセーションを巻き起こした」、都下新聞は一高野球以外に「更に興味あるものと宣伝」した、と評されているが⁸⁾、開催当時は後年ほどには注目されていなかった。例えば福澤諭吉が明治14(1881)年に創刊した『時事新報(以下『時事』)』では、明治36年11月には大相撲巡業に関し63行(1段弱)の紙面を費やし報道しており⁹⁾、他にも東京帝国大学の運動会について7行¹⁰⁾、東京府師範学校の運動会について17行¹¹⁾を用い報道している。これに対し第1回早慶戦については30行、メンバー表を入れても40行を費やしているだけである。つまり他大学・他校の学内運動会よりは紙面を用いられているものの、国技大相撲の巡業に関する報道には及ばなかったといえる。しかしその記事の中では、「実に満都野球界の注目にして私立学校の模範試合と為す所なり」、各学校より見物人約数千¹²⁾、「非常なる盛会」と報じられていた¹³⁾。

かように事前にはさほど注目されていなかった早慶戦であるが、開催してみると注目を浴び、数千人の観客が集うほどの盛り上がりを見せ、回を追うごとに注目されるようになり、やがてこうした注目により中止のやむなきに至る。明治38(1905)年春季は、早稲田大学野球部は日露戦争中であるにもかかわらず渡米した為、早慶戦は開催されなかった。同野球部は野球の本場米国で最新技術・知識を学び帰国後これを発表し、指導もした為、日本野球に「根本的な革命」をもたら

した。例えば、日本では全員がミットを着用し素足か足袋を履いていたのに対し、米国では捕手・一塁手以外はグラブを着用しスパイクを履いていた。また米国での練習はウォーミング・アップから始まり、秩序だった打撃・投手練習を行っていた。さらに米国では、ピック・オフ・プレーによる二塁走者牽制や、スクイズ・バントを行っていた¹⁴⁾。同年秋季の早慶戦では、統一された声援などの団体応援が行われ、慶應義塾大学側では指定された学生が学生服の上着を脱ぎ白いワイシャツ姿になり応援席に白く KO の人文字を描けば、早稲田大学応援席では「フレ、フレ、ワセダ」のエールが行われていた¹⁵⁾。

こうして明治38年の段階では野球のみならず応援のレベルも向上していたが、翌39(1906)年秋季、応援の過熱により早慶戦第3回戦が中止となる。この頃になると野球のみならず、テニスも学生スポーツとして注目を浴びてきた¹⁶⁾。東京高等師範学校・東京高等商業学校・慶應義塾大学・早稲田大学は「庭球界の大立者」とされ、後に触れる小泉信三は「慶應の驍将」として注目されていた¹⁷⁾。明治39年秋季早慶戦は10月13日、まずテニスにおいて行われた。「名にし負ふ斯界の両雄」による試合の為、観客が集まり試合前の段階で会場は満員となり、「実に物凄き盛況」であった。慶應義塾は「総大将」小泉・和田實ペアを一番手に置き一気に勝負を決める作戦であったが、小泉がミスを連発し、早稲田大学の勝利となった。試合自体は「近年稀に見る」出来であったが、早稲田大学応援団が「熱誠の余り」小旗を振って慶應義塾大学の選手の視線を惑わそうとしたのは「白壁の微暇」であったと報じられた¹⁸⁾。

このようにまずテニスで加熱した早慶戦であったが、野球は明治36年の第1回早慶戦と異なり、試合前から全国の注目を受けていた。約10日前の10月19日には、「野球界の大立者」早慶の試合は「試合中の試合として全国の野球団が指折り数へて待つ所」であり、審判については「一層の深甚の注意」をはらい、学習院野球部員を選んだ、と報じられていた¹⁹⁾。直前にも、各地方の学生中観戦の為上京するものが少なくない、上京できないものは結果を電報で伝えることを依頼するものが多い、試合当日の盛況ぶりは「想像の外なるべし」と報じられるとともに、両大学野球部の予想スターティング・メンバーが掲載された²⁰⁾。こうした盛り上がりの中で、両大学応援団は応援に関し事前に打ち合わせをしていた。すなわち、両大学応援団は大学挙げて応援方法を検討している、特に従来に対抗戦にしばし

ばみられた「卑劣醜陋なる行動を避け模範的の応援振りを示して試合をば一層神聖ならしめん」と両大学応援団が協議をした²¹⁾。

こうした盛り上がりの中、10月28日、第1回戦が早稲田大学戸塚球場で行われた。早稲田大学は日本初のディレイド・スクイズを見せたものの²²⁾、2対1で慶應義塾大学が勝利した。4万人が集まり「未曾有の盛況」、「球界以来の盛況」であったと、しかも6段、4枚のイラスト入り、打者の成績付きで報じられた²³⁾。なお同日、慶應義塾大学と東京高等商業学校とのテニス対抗戦が行われ、東京高等商業学校の応援が紳士的でなかったと来場者の多くが「眉を顰めて」語ったほどであったが、小泉信三の活躍もあり慶應義塾大学が勝利した²⁴⁾。早慶戦第1回戦の2日後でも、「府下在住の学生残らず此に蝟集したらんかと思はるゝ程の盛況」、両大学応援団は模範的であった、慶應義塾大学応援団がワシントン頌栄歌を即興で替え歌にした応援歌は「好き思ひ付き」、と好意的に報じられた²⁵⁾。こうした雰囲気の中『時事』の社説の中で、野球は近い将来「国中に大流行」し「回向院の角力に対する熱狂よりも更に一層の熱狂を惹起すに至る可きを疑はず」と評した²⁶⁾。確かに同紙の予測のごとく、野球自体は国技相撲を上回る程の大流行となるが、早慶戦はやがて中止となる。

11月3日、三田綱町グラウンドで第2回戦が行われ、0対2で早稲田大学が雪辱した。この試合に関しても、「満都の人氣は殆んど此処に集中」、「応援法の正々堂々たるは殊に快感」と、しかも今回も4枚のイラスト入り、打者の成績付きで報じられた²⁷⁾。

第3回戦は11月11日と決まり、野球ファンの関心は、その結着であった。例えば『時事』は、「其勝敗果して如何想見るだに骨鳴り肉躍るの感」あり、「一層盛なる応援法」が行われるだろうと述べ、両大学の応援歌を紹介している²⁸⁾。その一方で『時事』は11月9日に、両大学ともに応援を廃すべきとする説が伝えられているが「風説に過ぎざるべし」と一蹴している²⁹⁾。後に述べるように、11月8日に両大学首脳間で一旦は応援中止が合意されており、あるいは同紙はそうした情報を得ていたとも予想できる。

これまで述べたとおり、第2回戦までの新聞報道では試合も応援も順調に行われていたことになっていたが、明治39年11月10日、三田綱町グラウンドで行われる予定であった第3回戦は中止となった。すなわち、第3回戦は「定めて壮観なる

べしと人々も期待」し特に両大学学生双方とも「皆非常なる熱心を以て応援を為す模様」であり、「両三日来の意気込みを見るに当日所謂応援を因として如何なる不測の事態を発生するやも測り難き状あり」として第3回戦を無期延期とした³⁰⁾。また学習院側も、「危険の虞」ありとして学生審判出場を辞退した³¹⁾。つまり応援の過熱化により不測の事態が起こりかねないとして第3回戦は中止となった。第1回戦以降に実際には何があったかを次に述べよう。

既に述べたように戸塚球場で行われた第1回戦は慶應義塾大学の勝利となり、慶應義塾大学側応援団は大隈重信邸の前で万歳三唱をした。因みにそこには、テニスの試合を終えた小泉信三も居合わせていた³²⁾。三田綱町グラウンドで行われた第2回戦は早稲田大学の勝利となり、早稲田大学側応援団は福澤諭吉邸の前で早稲田大学万歳を三唱した。故意・過失は別として、両大学創立者の邸宅前で敵対する大学の応援団が万歳を三唱したことから両大学間で感情的な対立が生まれた。例えば、三田綱町グラウンドにおける早稲田大学応援席の設定に早稲田側が不満であれば早稲田中学・早稲田実業両校生徒らを招集し実力で場所を確保するという「不穩の形勢」を認めたため、新宿署から芝署に連絡があり、芝署が早稲田大学当局に警告したという³³⁾。この為、早慶両大学当局間の話し合いが始まった。11月8日、応援廃止を両大学が合意するも、翌9日、慶應義塾大学側が廃止に反対し、同日早稲田大学側が妥協案として応援席の折半を提案するも慶應義塾大学側が反対、ついに10日、鎌田栄吉慶應義塾塾長が大隈重信と安部磯雄早稲田大学野球部部长を訪れ、応援団同士の激しい対立から不祥事が発生する恐れがあるとして中止を申し入れ、早稲田大学当局も同意した³⁴⁾。

中止決定後、慶應義塾大学野球部と安部との間で意見の応酬があった。安部が中止後複数の新聞に所感を述べたが、これに対し慶應義塾大学野球部幹事が、安部は「吾人を呪はんとせり」、安部の「妄を弁せんとす」と述べた後、そもそも早稲田大学側の応援廃止案は不可能なことを提案し第3回戦中止の責任を我々に負わせ誣めるものである、と安部を激しく批判した³⁵⁾。これに対し安部は、自分が新聞に述べてきたことの中には「多少の誤謬」がある、応援廃止あるいは応援席折半を行えば無事に試合を行えるのに慶應が両案に反対し試合中止を申し入れるなら早稲田は受け容れる外ない、自分は慶應義塾大学野球部員を批判してはいない³⁶⁾、と反論した。

このように慶應義塾・早稲田両大学の応援団同士の対立は、両大学当局、両大学野球部間の対立をもたらし、ついに大正14(1925)年の復活まで、早慶戦は約20年間中止となる。しかも早慶戦中止の5年後、日本野球界はさらなる危機を迎える。『東京朝日新聞(以下『東朝』)』が主導した所謂野球害毒論である。本章の最後に、野球害毒論の内容とその影響をみよう。

明治44年3月28日から8月17日に早稲田大学野球部が、4月12日から8月12日まで慶應義塾大学野球部が渡米した。両大学の帰国に合わせるかのように『東朝』はいくつかの野球弾劾記事を掲載し、さらに追い打ちをかけるべく8月29日、次のように述べ、9月19日まで連続22回にわたり「野球と其害毒」という共通テーマで日本野球を批判し続けた³⁷⁾。すなわち、近年の野球の流行により「弊風百出し青年子弟を誤ること多き」が故に本紙はその真相を報道してきた。これに対し「野球に狂せる一派」は本社に妨害を加え、担当記者を脅迫した。しかし本紙は青年の前途を憂え、教育関係者の意見を聞き「最後の鉄案」とする。このように述べ、第1回目に登場したのが一高校長新渡戸稲造である。新渡戸は言う。野球は「巾着切の遊戯、対手を常にペテンに掛けよう、計略に陥れよう」と神経を鋭くして行う遊びである。米国人には適しても英・独国人には決してできない。英国の国技蹴球のように鼻や顎骨が歪んでも球に嘔り付くような「勇剛な遊びは米人には出来ぬ」。昨年早稲田大学野球部が軽井沢で外国人と試合をした。その際審判の判定を巡り早稲田の選手が外国人に向かい「ライヤー虚言家」と言い、試合は中止となった³⁸⁾。かつては野球強豪校であった一高校長らしからぬ偏見に満ちたコメントである。初回にかつての野球強豪校であると同時にエリート高校の校長の発言を取り上げ、影響を狙ったのであろう。あるいは大学野球の一方の雄早稲田大学の講師の発言も匿名ながら掲載された。早稲田大学野球部部長安部磯雄は野球部部員が皆真面目に出席し「学科も相当出来る様」に思っている。しかし自分の経験では「学科にかけては遅鈍、宿題をやらず、居眠りをし、試合前2~3週間は欠席する。早稲田大学は卒業生が多く経営基盤も固まってきたから「学校広告などは廃して実質の改善に主力を集注」すべきである³⁹⁾。早稲田大学関係者の発言であることから同大学野球部員の悪しき実態に信憑性を持たせるとともに、間接的に学生野球の父と崇められる安部への批判をも狙ったのであろう。さらには野球部OB河野安通志の懺悔までが掲載された。自分は選手の時「非常

に懶けて今では後悔して居る」。早稲田大学ではなく東京高等商業学校へ入学していたらと時々思わぬではない。明治38年に米国から帰国した際「浅い考へから妙な服装」をしていた。「其風が日本全国へ伝播するに至つた」し「其罪を懺悔せずには居られない」し、安部磯雄部長自身も自分の不注意であつたと語っている⁴⁰⁾。野球部OBとしての信憑性だけでなく、これもまた間接的な安部批判を狙っているといえよう。もっともこれに対しては、約1週間後に河野自身の反論が掲載されている。すなわち、「大体に於て小生が記者に対して云ひたる事と相違」している。安部磯雄先生のような「偉大なる人物」に接することができ「後悔などせず却つて感謝」している。さらに河野は新渡戸の談話にも反論する。虚言家といったのは早稲田大学野球部の選手ではなく外国人選手であり、自分は朝日記者にぜひ掲載してくれるようお願いしたのはこの点であり、朝日記者も承諾した。この点を掲載せず、野球の弊害を針小棒大に言うだけでなく、言ってもないことを掲載しているのは「悪みても猶余りあり」⁴¹⁾。このように反論を掲載させている点を見ると、『東朝』による野球害毒論は、必ずしも悪意のあるキャンペーン(campaign)ではないともいえよう。

これまでは早稲田大学のみが蛆上に載せられていたが、ついに早慶両大学が批判される。すなわち、早慶両大学野球部は貧乏な学生に海外遠征をさせているが、保護者の心情を思うと「残酷な仕方」である。野球をやらなければ教育ができないというのなら、早慶両大学を「打潰して」政府により適当な教育機関を起してもらえばよい。「早稲田慶應の野球万能論の如きは恰も妓夫や楼主が廢娼論に反対するが如きもので一顧の価値がない」⁴²⁾。これまでの論者と異なり品性に欠ける言辞が目立つが、それ以上に大学野球の両雄早慶両大学を口汚く罵っていることが注目される。

このような事実に対する批判や口汚い罵倒より影響力のあるのは、社会的地位だけでなく、国民から尊敬されている人間による批判である。学習院長乃木希典の批判はその好例であろう。彼は言う。学習院では子供らがやりたがるので野球を「行らしてある迄の事」で、「要するに此学校では野球を必要な運動と認めて居ない」。操練・体操・馬術・弓術・撃剣・柔道・水泳等を「学生の運動として必要なものと認めて居る」。「一方は必要ならざる遊戯として取扱ひ一方では学生に必要な運動として奨励して居る処を見れば其価値の如きは蓋し思ひ半に

過ぐる者があらう」⁴³⁾。これまでの論者に比し、用いる言辞は穏やかである。しかし皇族方が通われる学習院の院長という社会的地位のみならず、日露戦争の英雄として国民から尊敬されている点を考慮すると、その影響は計り知れない。事実飛田徳洲は、野球害毒論が勃発した際乃木の反対説は「かなり重要視された」と語っている⁴⁴⁾。因みに飛田は、本名は忠順。明治19(1886)年茨城県生まれ、水戸中学校卒業後早稲田大学入学。在学中野球部に所属し主将を務めたが、大正5年にシカゴ大学定期戦で大敗し辞任。大正8(1919)年早稲田大学野球部初代監督に就任し、同14年、シカゴ大学定期戦で勝ち越すと監督を辞任したが、その後も野球部顧問などの立場から指導を続けた。また早大監督就任前後に、読売新聞・朝日新聞記者として野球について報道した。「日本野球史の節目に必ず登場する最重要人物」であり、「学生野球の本質」、「魂の野球」を説き続け、後述する昭和期における野球規制に反論した「気骨のある言論人」で、昭和40(1965)年、野球殿堂入りを果たした⁴⁵⁾。あるいは飛田は本場アメリカのベース・ボール本来の性格に抗し、「日本的な性格、“野球道”を打ち建てるべく努力」した⁴⁶⁾、と評されている。

あるいは明治44年9月17日に行われた、欧州から帰国した乃木の歓迎会の模様を伝える記事に、その頃の乃木に対するイメージを窺うことができる。「質素を旨とし大将のお気に召すやうに」配慮された歓迎会で、乃木は「大将に於ては珍しき一大警語」を述べた。すなわち、欧州各国で日本は一等国になったとお世辞を言われた。「無闇にお世辞を云はれて之に乗るやうでは困る」。「今後は何よりも先づ其実を挙ぐるに努めねばならぬ」⁴⁷⁾。お世辞に乗るなどという発言は一般的な知恵であるが、乃木が言う则ち一大警語とみなされる。しかも乃木は常日頃警語を述べることがない控えめな存在と捉えられていることがわかり、歓迎会を乃木の気に入るよう質素を旨としたという記述からも、彼を控えめな存在としている当時の雰囲気窺うことができる。したがって野球害毒論の連載において、乃木が穏やかな言葉を使い野球は価値がないと婉曲に発言したとしても、飛田が言うように重要視され、影響力があったことが推測できる。

もっとも野球関係者は沈黙せず、9月16日、野球問題大演説会を開催し反論した。『東朝』の野球害毒論にも登場した河野安通志は、野球には精神の修養、協同一致の道德等の美点が限りなくある、と述べた。安部磯雄は、新渡戸や乃木の

ような「野球の門外漢」の言うことは全く気にする必要はない、と当時の名士を正面から批判した。内海弘蔵は、『東朝』の手前もあるので「是非とも早慶試合を復旧せしめざるべからず」と早慶戦復活を希求した⁴⁸⁾。河野が野球と精神・道徳とを関連させている点が注目される。

以上述べてきた野球害毒論は、偏見を含み、事実と反する面もあった。しかし当時の所謂名士、あるいは早稲田大学関係者・野球部OBによる発言であり、加えて日本野球の主導者早慶両大学を名指して批判していた為、野球界への衝撃があったといえよう。事実河野は演説会で野球と精神・道徳とを結びつけた論理展開をし、飛田は野球害毒論を受け、野球を武士道になぞらえ、野球道思想を確立したといわれる⁴⁹⁾。

本章の検討により、野球草創期に生まれ新聞報道では国技相撲の巡業にも及ばぬ扱いを受けた早慶戦は、わずか3年後には全国注目の的になり全国紙の社説で国技相撲より大流行すると予想されるまでになったが、応援の過熱により中止になったこと、さらに明治末期に野球害毒論により危機を迎えたことがわかる。早慶戦の中止と野球害毒論には、野球に対する道徳面での批判が通底しており、しかるが故に野球関係者は野球と精神・道徳とを結び付けるに至った。草創期における道徳面での批判は、その後の大学野球に対しても行われていく。

第2章 大学野球全盛期における早慶戦

本章では、早慶戦中止と野球害毒論により危機を迎えた大学野球が、いかにして全盛期を迎えたかを検討する。

明治末期に危機を迎えた大学野球は、大正時代になると発展へと転じた。大正3(1914)年、早稲田・慶應義塾・明治3大学により3大学リーグが結成された。これまで早慶両大学で行われていた大学野球に新たに明治大学が参加したことは、「日本の球界を拓げる端緒」となった⁵⁰⁾。同6(1917)年に法政大学が加わり4大学リーグとなり、同10(1921)年に立教大学が加わり5大学リーグとなった。同14(1925)年、東京帝国大学が加わり東京六大学野球連盟となり、ついに約20年ぶりに早慶戦が復活するに至り、翌15(1926)年には東京六大学野球連盟に摂政杯が下

賜された。東京六大学野球連盟ひいては近代日本の大学野球は、早慶両大学あるいは早慶戦を軸に昭和時代に全盛期を迎えるが、その契機となった早慶戦の復活についてみよう。

前章で述べたように、早慶戦が中止となった5年後に復活を求める声があったが、復活までにはこの時点からしてもさらに約15年を要した。中止から復活までの経緯を飛田は次のように語る。旧早慶戦（大島注一明治36年から同39年の早慶戦の意）時代の応援団の行動をみると「早稲田は慶応の秩序ある態度にはかなわない」。しかし中止の原因を早稲田大学側の応援団のみに帰するわけにはいかない。明治39年11月10日の早慶両大学当局間の合意は一時中止であった。しかし慶応は永久に早稲田と対戦しないという噂が飛んできたので、数度挑戦状を出すと返事は来ても慶応は対戦を受け付けない。ついに明治44年安部磯雄部長の命で挑戦状を出したが返事すら来ず、安部部長は機嫌を損ない、早稲田側から慶応に絶縁状を提出した。その後東京運動記者倶楽部や嘉納治五郎の奔走も実らなかったが、その間、早慶両大学野球部OB会による三田・稲門戦が実施された。準早慶戦ともいうべき三田・稲門戦は早慶戦の復活まで「日本野球界に圧倒的人気を集めた」。5大学リーグが結成されると、早慶両大学が対戦しない為、試合日程作成に手間取り夜中の12時になることもあった。この為大正13(1924)年春季、明治・法政・立教三大学の不満が爆発し、明治大学野球部部長内海弘蔵（大島注一明治44年の演説会で早慶戦復活を求めた内海と同一人物）と法政大学野球部監督武満国男が復活に乗り出した。早稲田は復活に賛成したが、慶応は応じなかった。ついに慶応を除いた新リーグを結成するという最終手段に訴え、大正14年秋季に早慶戦は復活した。ただし慶応野球部の低調時代の復活であった⁵¹⁾。この飛田の記述より、前章で指摘した早慶両大学の応援団、大学当局、野球部の対立とはつまるところ野球部間の感情的対立であり、約20年間の長きにわたった理由は慶應義塾大学野球部にあることがわかる。また準早慶戦ともいうべき三田・稲門戦が、早慶戦復活まで圧倒的人気であったとの指摘が注目される。この指摘により、日本全国に早慶戦復活を望む雰囲気があったことがわかる。さらに早慶戦復活に向けた努力をした人物の一人が、明治44年の段階で復活を求めている内海である点が興味深い。

こうした東京六大学野球連盟関係者の長年にわたる努力により復活した早慶戦

について、次にみよう。前述のように早慶戦復活を望む声が全国に存在しており、この為復活早慶戦が開催される前から、期待感が全国に溢れていた。「我が国野球界の二大王国」による早慶戦は「全国幾十万のファンが渴望的」であり、全国から電報為替による前売券申し込みが殺到しており、北海道から上京するファンもいる⁵²⁾、明治39年の早慶戦を見たことがあるが「あんな猛烈な応援」はもうみられないだろう、三田・稲門戦も時々見たが今回の試合を見るまでは大阪に戻らない、ボートがどう、ラグビーがどうといっても野球の前では太陽の前の月である、会社を休んでも見て行こうという声の紹介⁵³⁾は、こうした期待を表している。またこのような期待に応え、『時事』は新たな報道法を考案した。すなわち、早慶戦復活は「日本運動界の一大慶事」と述べた後、大掲示板に球場からの電話連絡⁵⁴⁾に基づきボール、ストライク、アウト、ヒット等の試合状況を示し、あたかも「球場に在つて眼前にゲームを目撃」するかのような臨場感を生むアメリカ製の「プレーヤーボード」を早慶戦当日日比谷公園旧音楽堂前に設置する、と報じた⁵⁵⁾。さらに『時事』は社説やコラムで、復活早慶戦がスポーツの模範となることを求めた。例えば社説は、「二十年間の中絶」だけでなく、早慶両大学の教育・運動両界における「優越なる地位」が今回の全国的な人気をもたらした、両大学関係者は競技・応援に於いて模範を示し早慶戦をナショナル・インスティテュション (national institution) たらしめよう、と野球の早慶戦をオックスフォード・ケンブリッジ両大学の対校エイトのような国民的慣習にしよう求めた⁵⁶⁾。コラムは、「スポーツマンシップを期待すること大」⁵⁷⁾、早慶戦を「ナショナルインスティテュションたらしむべき」⁵⁸⁾、と述べた。

降雨により2日順延となった復活早慶戦は、10月19日第1回戦は、0対1で早稲田大学、翌20日第2回戦は、1対7で早稲田の勝利であった。1・2回戦とも『時事』は一面トップで報道した⁵⁹⁾。第1回戦には午前9時開場、午後2時半試合開始のところ当日券を求める観客が午前5時に駆け付け、普段あまり見かけない女性の観客が多数訪れた⁶⁰⁾。また入場できなかった観客は、木、電信柱、球場付近の二階家から観戦し、また試合に関する問い合わせを断る記事も掲載された⁶¹⁾。さらに北白川宮と武田宮が来場され、試合前に2塁上に安部磯雄部長が登場し観客に向かい、拍手以外野次はもとより校歌・応援歌も控え静粛に観戦することを求めた⁶²⁾。第2回戦も注目され、日比谷に設置されたプレーヤーボード

前には午前10時半から人が集まり⁶³⁾、試合が行われた戸塚球場に25,000人集まったのに対し、日比谷には15,000人が詰めかけた⁶⁴⁾。こうした盛り上がりを受け『時事』は、10月20日から同24日まで日本橋白木屋呉服店で、早慶野球戦復活記念展を開催した⁶⁵⁾。2日間滞りなく試合は実施され、復活早慶戦は無事に済み「同慶に耐へぬ」、ナショナル・インスティテューションの「一たる資格は二日間の試合で証明された」との高評価を得た⁶⁶⁾。

約20年ぶりに再開された早慶戦は成功裡に終わり、以後東京六大学野球連盟、ひいては大学野球は早慶両大学を中心に発展した。復活早慶戦では皇族方のご来場を仰いだり、ついに昭和4(1929)年秋季、昭和天皇のご来場の下、早慶戦が行われた。次にこの天覧早慶戦について述べる。

大正13年に、当初は学生以外の選手が集うことになっていた明治神宮大会が開始された。日本のスポーツは高等教育機関の課外活動として受容され発展してきたが、学生不在のスポーツ競技会が企画・実行されたのは、スポーツの国民化・大衆化の結果であるとされている⁶⁷⁾。昭和4年の明治神宮大会では、同年東京六大学野球連盟秋季リーグの1・2位校による試合に天皇のご来場を賜ることとなった。このため同秋季リーグの優勝争いは熾烈を極めたが、結局早稲田大学が優勝し、慶應義塾大学は2位となり、結果的に同年の明治神宮大会では天覧早慶戦が行われることとなった。

天覧早慶戦ということもあり、開催前から人気が高まっていた。例えば試合前日の10月31日、東京府、東京市、東京商工会議所に送付した天覧早慶戦優待券が無効になったとして、明治神宮体育会総務委員渡辺鉄蔵が辞任した。これは同会副会長平沼亮三が、「典型的な応援を天覧に仰がふ」として早慶両大学に応援券を配布したことに起因する⁶⁸⁾。天覧早慶戦への人気の表れであるが、天覧にかなう応援として早慶両大学の応援を捉えていたことがうかがわれる。試合当日の朝刊も、「全国ファンの血を湧す早慶の大試合を天覧あらせられる」と報じ、早慶戦であるだけでなく、天覧試合であることが強調されていた⁶⁹⁾。当日券を求め5万人が押し寄せ、内野席は発売開始30分で売り切れた⁷⁰⁾。

11月1日の天覧早慶戦は12対0で慶應義塾が大勝したが、一面トップで、「スポーツの華と謳はるゝ六大学リーグ戦」、今季優勝校早稲田と二位校慶應義塾の野球戦、と報じられた⁷¹⁾。因みに明治神宮大会における他競技は二面で報じられ

た。東京六大学野球の位置づけを窺うことができる。天覧試合である為、「静粛謹厳且つ熱誠を以て」応援は行われた⁷²⁾。昭和天皇は秩父宮のご説明を受けながら「御興深げに」試合をご覧になり、予定を20分延長し観戦された⁷³⁾。なお翌2日には、中等学校野球の試合も行われたが多数の観客が集まり、「どうでも野球ならでは夜の明けぬ世の中」と報じられた⁷⁴⁾。大学野球だけではなく、中等野球の人気の高さを窺うことができる。

このように大正末に復活した早慶戦は、昭和になると人気さがさらに高まったが、次のような代表的な総合雑誌での評価は大学野球の人気の表れであろう。最近の「野球熱の流行は、恐らく、従来の封建的日本の国技に替つて、新たなる資本主義の国民的スポーツの生誕を物語る」。「就中、早慶野球戦の前景氣的記事」が朝刊に出ると、その日は「野球狂乱時代の日」となる⁷⁵⁾。「従来の封建的日本の国技」とは相撲を指すと思われるが、この記述より大学野球全盛期においても大学野球は国技相撲に替わって国民的人気を得たとみなされていたことがわかる。

こうした人気は大学野球とりわけ早慶戦自体の魅力のみならず、その他の要素にも支えられている。まずラジオ放送である。ラジオによる全国初のスポーツ実況放送は昭和2年8月の中等学校野球であり、同年10月には東京6大学野球の中継も開始された。野球と相撲等の中継はラジオ番組の中核であり、視聴契約者を増加させた。ラジオ中継により野球ファンが増え、野球場へつめかける観客も増加した⁷⁶⁾。野球のラジオ中継で人気のあった松内則三アナウンサーはレコード「早慶野球戦」を発売し、15万枚以上を売り上げ、小学生がその声色を物まねしたという⁷⁷⁾。次に中等野球と社会人野球である。大正4年夏より大阪朝日新聞社により全国中等学校優勝野球大会が、大正13年春より大阪毎日新聞社により全国中等学校選抜野球大会が始まり、大正13年からは甲子園で開催されるようになり、ここに中等学校野球が始まった。また昭和2年、東京日日新聞社により都市対抗野球が始まり、その成功は日本野球界に構造変化をもたらした。甲子園で活躍した中等学校野球の選手は大学野球へ、大学卒業後は都市対抗野球へという進路が確立したのである⁷⁸⁾。

こうして様々な要因から昭和初年代に大学野球は全盛期を迎えた。この点は、前に述べた天覧早慶戦に関する報道からもわかるが、この外にも、新国劇が新橋演舞場で「早慶決戦の日」を上演し、帝国キネマが映画「若き血に燃ゆる者」を

制作し、横山エンタツ・花菱アチャコが漫才「早慶戦」を演じ、全国的人気を博した⁷⁹⁾。あるいはこの後述べる八十川ボーク事件、水原リング事件の頃が「昭和初期の黄金時代」とも評されている⁸⁰⁾。

このように全盛期を迎えた大学野球であるが、不祥事に見舞われ、あるいは規制を受けるようになる。因みに昭和6年春季に中央大学、日本大学、専修大学、東京農業大学、国学院大学により東都大学野球連盟が、同年秋季には関西大学、関西学院大学、同志社大学、立命館大学、京都大学、神戸大学により関西六大学野球連盟が結成された。同6年春季リーグ戦開幕から6日後、『時事』は「野球狂時代に君臨する六大学リーグ戦」と評した後、次のように報じた。昭和6年5月15日、早慶明3大学応援団が初めて東京六大学野球連盟と会合を開き、フェアプレーの精神に反した応援が今季も散見されるが、警察の介入は最小限にとどめ、フェアな応援をすることで合意した⁸¹⁾。しかし5月18日の慶明戦において、明治大学側応援団が暴力行為を行うに至った。明治大学野球部投手八十川胖が走者1・3塁の場面で、3塁へ牽制すると見せて一転1塁へ牽制した行為がボークとみなされ、慶應義塾大学が勝利した。ボークの判定を巡り激高した明治大学側の応援団がグラウンドに乱入し、やがて両大学の応援団同士の対立となり、慶應義塾大学側に負傷者が出て、警察官が出勤するほどの騒ぎとなった。所謂八十川ボーク事件である。従来ボークの基準が不明確であり開幕前に新たな基準が設けられ八十川はボークを取られたが、この改正は早慶両大学野球部には伝達されていたが、残りの4大学には伝えられていなかった。この為『時事』はコラムの中で、学生スポーツにおける暴力は「許し難い悪例」と酷評する一方で⁸²⁾、「リーグの威信確立の為に」組織の欠陥を改正すべきとした⁸³⁾。また同紙社説は、明治大学側の応援団の暴力を「言語道断の亡状」、「最も苦々しく思ふ所」と厳しく難じ、あるいは各大学応援団が勝敗に拘り「見苦しき狂態」を見せているが「大学々生たるもの々自尊心に顧みて、今後大に反省」すべきである、今回の暴行事件は各大学に「最も適切なる反省自重の実物教育」を与えた、と大学生に倫理・道徳を求め、同時に、場内の無秩序が事件をもたらしたとして連盟自体にも反省を求めた⁸⁴⁾。読者も投書欄で暴力行為を「唾棄すべき行為」と非難し、「神宮球場の神聖」の保持を求めた⁸⁵⁾。明治天皇の偉業を記念した明治神宮の球場で行われる大学野球であるだけに神聖であること、倫理・道徳が求められたのである。あるいは『時

事』は月末に、井上準之助蔵相の官吏減俸案をボークに喩え、批判するイラスト（全面）を付録として発行した⁸⁶⁾。この点にも、八十川ボーク事件の影響の大きさを窺うことができる。

次に学生野球に対する規制について述べる。八十川ボーク事件勃発時、慶應義塾大学在学中野球部主務を務め、卒業後『時事』記者となった鷺沢与四二は、次のように東京六大学野球連盟に警告をしていた。日本野球は「有史以来の大繁昌」であるが、「朝野両面に色々の議論を生じ」ている。官憲が弄り壊すべきでなく、野球関係者自らが自発的に解決をすべき時が来た⁸⁷⁾。また鷺沢は次のように入場料について苦言を呈する。東京六大学野球の入場料収入は多額であるが、興行ではないことを理由に課税されていない。官憲からの取り締まりが嫌なら「自ら進んでの実際解決を断行」すべきではないか⁸⁸⁾。鷺沢の指摘するように、全盛期を迎えた東京六大学野球には様々な問題が存在した。その表れが八十川ボーク事件であったが、それ以外にも、とりわけ入場料問題を挙げることができる。天覧早慶戦の際の秩父宮のご助言に基づき、神宮球場は観客席を拡張し観客が増加した。その結果入場料による収入が増え、六大学野球部の収入も増加した。このような状況の中、昭和7(1932)年4月1日、学業に支障をきたさない試合日程、入場料の使用制限を内容とする所謂野球統制令が施行され、試合数削減、平日試合の禁止、有料試合の許可制が求められた⁸⁹⁾。こうした規制に反発を示した野球関係者の一人が飛田である。まず飛田は、野球界は全盛であると考えてはならない、何故なら学生野球にとり最重要の野球部精神が忘れられているからであるとして学生野球が「野球の本道」に帰ることを説き、大学野球側に反省を求めた。一方飛田は、試合観戦により学生に愛校心を与え、これが愛国心や日本精神につながる、精神の伴った野球部の結成こそ何者の侵入をも排撃することを知るべきである、と学生野球の自治を求めた⁹⁰⁾。鷺沢も飛田も全盛期を迎えた東京六大学野球の諸問題を認め、大学野球側の自主的な改善を求めたのである。とりわけ飛田が、解決策として大学野球に精神性を求めたことが注目される。

このように早慶両大学野球部関係者から苦言を呈された東京六大学野球であったが、野球統制令が施行された翌年の昭和8(1933)年、しかも早慶戦で再び不祥事が生じた。因みに少なくとも同年秋季の段階では、東京六大学野球連盟は他連盟より格上にみられていた。例えば同年秋季の明治神宮大会では、東京六大学野

球連盟に所属する各大学の新人チームと東都大学野球連盟の一位日本大学と二位専修大学との対戦が組まれたが、「五大学が六大学と同レベルに対立し得るか如何の試金石として重大なる試み」と評されていた⁹¹⁾。加えて東京6大学の中でも、早慶両大学は特別視されていた。例えば、明治神宮大会の開幕カードは早慶両大学の新人戦であったが、「皮切りに相応しい早慶新人戦」と目されていた⁹²⁾。こうした環境下で昭和8年10月22日の早慶戦で、所謂水原リング事件が発生した。同日、勝者を決する早慶第3回戦が行われた。「応援団の肅正が叫ばれ、模範的な」応援を示そうとする一方で、試合前から場内は「興奮のルツボに殺気さへ漲る」状況であった⁹³⁾。8回裏三塁守備につく水原茂の下に三塁側早稲田大学応援席からリングが投げ込まれ、水原は守備の妨げにならないようにリングを投げ返した。9対8で慶應義塾大学が勝利を取めると、早稲田大学側の応援団がグラウンドになだれ込み、水原に謝罪を求めたが、慶應義塾大学野球部は既に退場していた為、慶應義塾大学側の応援団と揉み合いとなった。その際早稲田大学側が慶應義塾大学応援団が所有する「学校の名誉にか々はる指揮棒」を奪った為、慶應義塾大学側が激高し指揮棒の返却を、早稲田大学側は飽く迄も水原の謝罪を求め、警官の制止もきかず一時間ほど対峙する事態になった。両大学応援団の交渉の後、慶應義塾大学側が引き上げ、早稲田大学側も午後6時に退場した⁹⁴⁾。三田に引き上げた応援団に対し、慶應義塾塾長就任直前の小泉信三は、「よくがまんして帰ってきた」と労ったという⁹⁵⁾。翌日両大学応援団は声明書を発表し、お互いを非難し合う泥仕合となった⁹⁶⁾。因みにこの事件以後、早慶戦においては、先攻・後攻にかかわらず、一塁側が早稲田大学学生応援席、三塁側が慶應義塾大学学生応援席と固定され、今日に至っている。

水原リング事件に対し、慶應義塾の卒業生であり『時事』社主である武藤山治は翌日次のように述べた。こうした争いは翌日双方が謝罪し、笑っておしまいにするものである。世間は早慶学生の乱行を非難するであろうが、自分は学生が常軌を逸したことより、世間に気兼ねし卑屈な態度をとることに反対する。世間に卑屈になると新聞に操られる場合が多い。「今日の新聞は何か事あれかしと待つてゐる」⁹⁷⁾。学生に対し好意的であることはもとより、マス・メディアによる操作を指摘している点が注目される。事実太平洋戦争後、早稲田大学学生応援席で観戦していた人物が、水原リング事件はマス・メディアが「非常に騒いだのがよ

けい大きくしました」と回顧している⁹⁸⁾。投書も武藤と同趣旨であった。すなわち、事件は若人共通の興奮、勝利のかかった興奮時に「起り勝ち」な興奮から起こった、ファンとしては「純真な学生と言ふ気持で笑つて貰ひたい」⁹⁹⁾。若い大学生は興奮しやすいもの、純真であるべき、という認識を窺うことができ、こうした認識に基づいた早慶両大学学生への同情をも見て取ることができる。

しかし学生に同情的な社主や読者と異なり、『時事』のコラムは事件に対し厳しいコメントを連続で掲載した。すなわち、学生は「暴力団と化した」、「学生スポーツを汚瀆する応援団」、学生・大学当局は「猛省せよ」¹⁰⁰⁾、早慶戦を「も一度中止と行くか」¹⁰¹⁾、「暴力応援団」¹⁰²⁾、野球は「没落の一途あるのみ」¹⁰³⁾、「猛獣応援団」¹⁰⁴⁾、と5日間連続で批判した。大学生による暴力を厳しく非難しているとともに、暴力を生み出した大学当局や野球自体に批判が向かっていることが注目される。

本章の検討より、大正14年に復活した早慶戦は全国紙が一面トップで報道するに至り、昭和初年代になり大学野球は全盛期を迎えたこと、様々な問題点を自主的に解決することができず昭和7年野球統制令という規制を受けることになったこと、それでも水原リング事件が生じ大学野球を応援する側のみならず大学当局や野球自体までが批判されるようになったこと、野球統制令への飛田の言論や各事件での部外者のコメントからもうかがえるように、全盛期においても大学野球に精神性が求められたことがわかる。さらに大学野球全盛期においても、大学野球は国技相撲に替わる国民的スポーツと捉えられていたことも明らかになった。

1929年の世界恐慌から派生した昭和恐慌や、昭和6年に勃発した満洲事変にもかかわらず、昭和初年代はまだ平和な時代であった。そこで次章では、戦時下における早慶戦をみよう。

第3章 戦時下における早慶戦

昭和12(1937)年7月7日日中戦争が勃発し、翌13年(1938)国家総動員法が成立したことにより、官僚による統制が国民の日常生活を圧迫し始めた。日中戦争は泥沼化し欧米列強の介入が始まり、ついに昭和16(1941)年12月8日、日本は英米

両国に宣戦布告をし、太平洋戦争が始まった。本章では、戦時下における早慶戦を検討し、平和な昭和初年代でも批判を受けた大学野球がどのような処遇を受けたかを明らかにしよう。

日中戦争勃発は、日本国内に種々の変化をもたらし、野球は「スポーツの代表的な存在として、多くの逆境に直面」した¹⁰⁵⁾。例えば所謂一本勝負論である。すなわち昭和14(1939)年7月、石黒英彦文部次官がスポーツは一本勝負が妥当として、大学リーグ戦を全て1回戦制に変更することを求めた。これは一本勝負にこだわる日本特有の精神主義であるとともに、多額の入場料収益を得ている東京六大学野球連盟への統制強化でもあった。こうした規制に対し飛田は「以前にもまして強い口調で」大学野球擁護を行った。例えば『中央公論』昭和14年10月号に掲載された評論「大学野球の周辺」で次のように述べる。スポーツの練習は苦行であるが、そこから郷土愛、母校愛、愛部心、ひいては祖国愛が生まれる。文部省による統制は「大学リーグ戦の全盛に有頂天となつて自省を忘れた天罰」である。野球関係者は「日本の正統野球としての学生野球を護らねばならない」¹⁰⁶⁾。これまで同様飛田は精神論と結び付けることにより大学野球を擁護しているが、かつて全盛期にあった時の大学野球を批判していること、大学野球こそが日本の正統な野球であると指摘していることが注目される。翌15(1940)年にも飛田は、大学野球を擁護する評論「学生野球論」を発表した。現在の大学野球部の多くは「野球道に対する信仰を持っておらぬ」。「早稲田の野球精神」は「死の練習によって選手の脈管に流れ込んだもの」である。大学野球の立て直しは猛練習をすることである。「純正野球道を固守するもの学生野球以外にはない」¹⁰⁷⁾。この評論にも大学野球と精神論とを結びつける飛田特有の論理がみられるが、早稲田大学野球部こそ純正野球道を固守するもの、という自負心を窺うことができ興味深い。

一本勝負論以外にも、野球に規制が加えられた。開戦前の昭和16年7月中等学校野球の甲子園大会が中止となり、開戦後の昭和18年4月6日に文部省からリーグ戦不可とする覚書が交付されると、東京六大学野球連盟、続いて東都大学野球連盟、関西六大学野球連盟も解散となった。あるいは昭和15年頃から英語の使用禁止が始まり¹⁰⁸⁾、昭和18年には陸軍の命令で野球用語を日本語化することが求められた。東京六大学野球連盟は、ストライクを本球、ボールを外球、アウトを

倒退、セーフを占塁等に翻訳した¹⁰⁹⁾。

戦局の悪化とともに、大学野球への規制だけではなく、ついには大学野球自体が消滅することになる。先に述べたように各大学野球連盟は解散されたものの、個別の対抗戦は許されており、東京6大学野球部は対抗戦形式で試合をしていた¹¹⁰⁾。しかし昭和18年10月2日、日本軍の兵士不足への対応として、学生の徴兵猶予制度廃止の勅令が公布され、20歳以上の学生は10月25日に全国一斉で徴兵検査を受け、合格者は、陸軍は12月1日、海軍は12月10日に入営する、所謂学徒出陣となった。これを受け各大学は、学徒を壮行する行事を行った。10月5日、慶應義塾大学での壮行会で小泉信三塾長は、入営までの2か月一日一日を大切にしたい、私は学生諸君の「忠節勇武の精神には全幅の信頼を置く」と学生を送る学長としての典型的な言葉の後、一転して大学教育の現状への不満を述べる。すなわち、今日の大学では学問のための学問を行い現実から遊離し、独善的になっている。私は「諸君が帰還した場合には」大学が立ち直っていることを断言する。その点心配なく征って戴きたい¹¹¹⁾。最後は再び戦時下における典型的な言葉で締めくくっているが、突然大学のあるべき姿を述べる文脈で学生が帰還した場合に言及している。この頃には公の場で学長は学生の生還に直截に触れることが困難であり、この小泉の表現が限界であった¹¹²⁾。

このような状況において、慶應義塾大学野球部部員から今生の別れに早稲田と戦いたいとの声が上がリ、学徒出陣の思い出として早慶戦が一番良いと考える¹¹³⁾。野球部部長平井新は賛成し、小泉塾長に相談すると快諾された。平井は野球部の総意として早慶戦開催を飛田に申し込んだ。飛田は田中総長の許可を求めたが、田中は認めなかった。因みに田中は、明治9(1876)年長野県に生まれ、同29(1896)年東京専門学校を卒業し、昭和6年早稲田大学総長就任、昭和19年死去している¹¹⁴⁾。田中は、昭和18年春に早慶戦を求める声が上がった時にも、これを拒否していた。結局飛田は早稲田大学野球部の責任の下、早慶戦を実施することとした¹¹⁵⁾。また同年3月頃、野球への圧迫の下東京六大学野球連盟理事の飛田、直木松太郎(慶應義塾大学)、藤田信男(法政大学)等がリーグ戦存続をかけ懸命に努力しながらも効果がなかった際、飛田は「最後の救い」を小泉に求めた。小泉は体育審議会でも野球弾圧は無意味、一方的で、国民を無用に刺激することは避けるべきであると、諄々と説いた¹¹⁶⁾。飛田は田中にも援護を求めたが、田中は

部下の結婚式を理由に審議会出席を断ったという¹¹⁷⁾。

このように田中とは異なり小泉は大学野球の為に尽力していたが、ここで小泉の経歴について述べよう¹¹⁸⁾。小泉は明治21(1888)年5月4日東京生まれ、明治35(1902)年慶應義塾普通部編入学、明治43(1910)年年慶應義塾大学政治科卒業及び同大学教員採用、大正5(1916)年年慶應義塾大学教授、昭和8年から同22(1947)年まで慶應義塾塾長を務め、昭和24(1949)年東宮職常時参与、昭和34(1959)年文化勲章受章、昭和41年5月11日死去した。大学入学までは勉強をせずテニスに打ち込み、前に述べたようにテニス選手として注目されていた。しかし大学に入学し福田徳三の講義を聴き感銘を受けてからは学問に目覚め、研究者となった。テニス経験者であることからテニス部部长を務めたこともあるが、野球をこよなく愛していた。最後の早慶戦実施に貢献したことから、昭和51(1976)年に野球殿堂入りをした。また戦時期には、国粹主義者等からの慶應義塾への圧力をかわす為に学内改革を行い、あるいは戦前、戦後共に対米協調論者であったにもかかわらず、戦時下には言論界において反米論を積極的に展開した。

次に野球殿堂入りをした理由となった、最後の早慶戦実施に向けての小泉の貢献を検討する。飛田の貢献はこれまでの記述より明らかであるが、小泉に関しては、「小泉塾長下の慶應義塾であったからこそ実施を所与のこととして進められ」た、と言われている¹¹⁹⁾。早稲田大学は野球部が実施を求めているも、田中を始めとする大学当局が反対していた為実施まで曲折があったが、慶應義塾大学の場合小泉塾長の下一致結束することができたということの意味している。あるいは最後の早慶戦当時早稲田大学野球部主将であった笠原和夫は、飛田が責任をとる覚悟をしてようやく実施が決まったと飛田の尽力を指摘しているが¹²⁰⁾、最後の早慶戦における小泉の存在を次のように回想している。三塁側の応援席で学生から拍手をもって迎えられた小泉を見て、「われわれはうなった。声にならない声でうなった。そして一瞬慶応をうらやましいと思った」。早稲田は田中総長が来ていない。「私はつくづく慶応の野球部は幸福だと思った。(中略)この小泉塾長の積極さ、学生を思う気持ちと、田中総長の尻込みした態度。戦う前は完全に早稲田の敗北であるような気がしてならなかった」¹²¹⁾。この回想は、最後の早慶戦実施に反対し、試合当日に現れなかった田中総長と対比させながら、慶應義塾大学が小泉塾長の下一致結束している姿をライバル校の目から認めたもの

である。また当時早稲田大学野球部主務を務めていた相田暢一は、試合当日バックネット裏に誘導しようとする、学生と一緒にいいと三塁側応援席へ向かった小泉の姿を回想し、後年松尾俊治に次のように語った。こういう塾長の下で学べる学生は幸せと思うと同時に、これでこの試合は完璧になったと思った。この話を受け松尾自身も、小泉塾長までみえたから早稲田当局は何もできない、無事早慶戦ができると「だれしもが思った」と回想している¹²²⁾。つまり小泉は存在自体により学内を結束させ、最後の早慶戦実施に支障をきたさない為の避雷針のような働きをしたといえる。先に述べたように学生時代に自身が早慶戦で勝つ喜びを知っており、塾長就任直前に水原リング事件直後に学生を労った小泉ならではの言動である。

先に述べたように戦時期の小泉は大学を護るために時局に迎合する姿勢を見せたが、最後の早慶戦の際には、田中総長と異なり、自身の存在により実施に貢献したのである。前にも述べたように、昭和18年に東京六大学野球連盟は解消したが、個別の対抗戦は許されており、現に最後の早慶戦が行われた10月、慶法戦や早東戦が行われている。しかし早慶戦には他の「対抗試合とは比較できない重みがあり、集客も戦時の国民への心理的影響力も格段の差があった」と評されている¹²³⁾ように、大学を守る立場にある者であれば早慶戦が持つ様々な影響を考慮せざるを得ない。その意味では田中の行動は首肯されるであろうし、それだけに小泉の行動は評価される。

以上のように、小泉と飛田の尽力により実施に至った最後の早慶戦であるが、かつてのように新聞で大きく取り上げられることはなかった。『東朝』はまず10月16日付夕刊で33行の記事で伝え、「嘗て満天下の人気をさらつたのは今は昔の想出」と報じているが、同夕刊では早稲田大学漕艇部が東京湾を横断した記事を63行、しかも写真付きで報じている。また『東朝』は17日付が26行で報じてもいる。『毎日』の場合、10月14日付記事が9行、10月16日付記事が24行、10月17日付が28行であるが、スコアと打撃成績付きのメンバー表を記載し、「伝統の早慶野球史に終止符を打つた」とコメントした。『読売』は、10月17日付記事が、33行で写真、スコア入りで報じた。また同記事では、「早慶学徒の最後の想ひ出を飾つた、「決戦場へ進出にふさはしい思ひ出の早慶戦であつた」、とコメントした。一般紙もまた野球の早慶戦を、最後の思い出と位置付けていることがわか

る。こうして第1回早慶戦から40年後の昭和18年、近代日本における早慶戦は閉幕した。

本章の検討より、戦時下において大学野球に対し規制が加えられ飛田が精神論に基づき反論したこと、この飛田と小泉の存在により出陣学徒の最後の思いでとしての早慶戦が実施されたことが明らかになった。この二人の貢献があればこそ、戦時下にあっても早慶戦ひいては大学野球が守られたといえる。早慶両大学学生に限定されていたとはいえ、出陣学徒の最後の思い出は、相撲を始めとするその他のスポーツではなく、紛れもなく野球であったことは特筆大書されるべき事実である。

結 論

明治36年に始まる大学野球は、第1回早慶戦時は新聞において国技相撲の巡業にも及ばない扱いであったが、わずか3年後には国技相撲を上回る大流行をすると全国紙社説で予想されるほどの注目を集めたものの、早慶両大学の応援団の過熱により中止になった。また日本野球は全国的に注目された為、明治末期には全国紙により野球害毒論を展開され、野球関係者は道徳・精神論を以て反論した。約20年後に復活した早慶戦は全国紙の一面トップで報道されるほどの注目を浴び、昭和初年代には全盛期を迎え、国技相撲に替わる国民的スポーツと捉えられたが、度重なる不祥事により批判を受け、野球関係者は再び道徳・精神論で擁護せざるを得なかった。戦時期にも野球への規制は変わらず、野球関係者は相変わらず道徳・精神論で野球を擁護せざるを得なかった。昭和18年の最後の早慶戦は最早かつてほど注目はされなかったが、出陣学徒にとり最後の早慶戦として選ばれた種目は、国技相撲ではなく野球であった。

明治36年から昭和18年までの40年間、大学野球は常に注目を浴び、国技相撲以上に刮目され、したがって批判も受けた。そういった意味で、近代日本において野球は準国技であった、と言える。

【注】

- 1) 例えば、池井優「日米関係史における野球の役割について」(『政治経済史学』第115号<1975年12月>所収)、坂上康博「国民統合装置としてのスポーツ—1928~32年を中心に—」(『歴史学研究』第622号<1991年8月>所収)、中村祐司「戦時下の『国民体育』行政—厚生省体力局による体育行政施策を中心に—」(『早稲田大学人間科学研究』第5巻第1号<1992年3月>所収)、尹良富「巨人軍の創設とプロ野球報道に関する一考察」(『一橋論叢』第117巻第2号<平成9年3月>所収)、坂上博康「スポーツと天皇制の脈絡—皇太子裕仁の摂政時代を中心に—」(『歴史評論』第602号<2000年6月>所収)、赤澤史朗「戦時下の相撲界—笠置山とその時代—」(『立命館大学人文科学研究所紀要』第75号<2000年11月>所収)、波多野勝「国際協調時代の日米スポーツ交流」(『渋沢研究』第23号<2011年1月>所収)、高嶋航『帝国日本とスポーツ』(塙書房、2012年3月)がある。あるいは必ずしも大学野球を中心に検討しているわけではないが、有山輝雄『甲子園野球と日本人』(吉川弘文館、平成9年4月)が存在する。
- 2) 『黄金時代』には発行年月が記されていないが、同書は、平成4年10月23日から同年12月6日まで行われた新宿歴史博物館特別展「学生野球の昭和史—六大学野球の黄金時代」で配布された図録である。
- 3) こうした区分は例えば、『球界』2—6頁、『外史』2頁で示されている。
- 4) 日本で初めて野球が行われた年には諸説あり、『黄金時代』は明治5年とし(4頁)、『球界』は5年説と6年説とがあることを紹介した上で6年説をとっている(1頁)。
- 5) 『黄金時代』10頁。
- 6) 『球界』10頁。
- 7) 『球界』9頁。なお、練習試合としてしか応じない例としては、一高のバッティング・オーダーが守備位置順(一番:投手、二番:捕手、九番:右翼手)であったことが挙げられている(『外史』22頁)。
- 8) 田原茂作編『日本野球史』(厚生閣書店、昭和4年7月)248—250頁。
- 9) 「谷ノ川等一行の巡業雑記」(『時事』明治36年11月12日)。
- 10) 「帝国大学運動会」(『時事』明治36年11月15日)。
- 11) 「東京府師範学校運動会」(『時事』明治36年11月16日)。
- 12) 『球界』では、約3,000名としている(9頁)。
- 13) 「慶應義塾対早稲田大学野球試合」(『時事』明治36年11月22日)。
- 14) 『球界』11頁。
- 15) 『球界』12—13頁。
- 16) 例えば「球界の活気」(『時事』明治39年10月3日)では、「野球庭球共に目を追うて漸く活気を示し来たり」と評されている。
- 17) 「高等師範慶應義塾庭球試合」(『時事』明治39年10月1日)。
- 18) 「慶應対早稲田庭球試合」(『時事』明治39年10月14日)。
- 19) 「運動競技界—大試合の審判者」(『時事』明治39年10月19日)。あるいは早慶戦1週間前の10月21日に慶應義塾大学野球部と外国人アマチュア倶楽部との対戦が予定されていたが、この試合に「少なからぬ注意を加へ居るもの多く」と報じられていた(「対外野球試合」(『時事』明治39年10月20日))。
- 20) 「運動競技界—野球大試合選手」(『時事』明治39年10月26日)。
- 21) 「運動競技界—盛なる応援隊」(同上)。

- 22) 『球界』13頁。
- 23) 「慶應早大野球大試合」(『時事』明治39年10月29日)。
- 24) 「対抗庭球試合」(同上)。
- 25) 「早稲田慶應野球大試合雑感」(『時事』明治39年10月30日)。
- 26) 社説「ベース・ボール」(『時事』明治39年10月30日)。
- 27) 「慶應早大野球大試合」(『時事』明治39年11月4日)。
- 28) 「球界雑聞」(『時事』明治39年11月8日)。
- 29) 「野球試合応援について」(『時事』明治39年11月9日)。
- 30) 「早大慶應野球試合の無期延期」(『時事』明治39年11月11日)。
- 31) 「学習院の謝絶」(同上)。なお同記事によると、学生審判予定者には数日前「激越なる強迫状」が来ていたという。
- 32) 『外史』30頁。同書によれば、球場から引き上げる慶應義塾大学側の応援団と、テニスの試合を終え野球の結果を知るべく駆けつけた小泉たちが大隈邸の前で偶然出会い、互いの勝利を知り思わず万歳を三唱したという(29頁)。
- 33) 「決勝試合に付早稲田方の意気込」(『時事』明治39年11月11日)。
- 34) 前掲『球界』の外に、安部磯雄「野球試合中止に就て」(『時事』明治39年11月15日)を参照。
- 35) 慶應義塾野球部幹事「試合中止に関する告白書」(『時事』明治39年11月13日)。
- 36) 前掲安部「野球試合中止に就て」。
- 37) 『東朝』が野球害毒論を連載し始めた経緯に関しては、『野球と戦争』67頁を参照のこと。
- 38) 以上連載の経緯と新渡戸の談話は、「野球と其害毒 新渡戸一高校長談」(『東朝』明治44年8月29日)。
- 39) 「野球と其害毒(五) 早稲田大学の為に惜しむ 早稲田大学講師某氏談」(『東朝』明治44年9月2日)。
- 40) 「野球と其害毒(八) 旧選手の懺悔 河野安通志氏談」(『東朝』明治44年9月5日)。
- 41) 「野球と其害毒(十三) 野球に対する余の意見 早稲田大学講師 河野安通志氏談」(『東朝』明治44年9月13日)。
- 42) 「野球と其害毒(十五) 百弊あつて一利無し 日本医学校幹事 磯部検三氏談」(『東朝』明治44年9月12日)。
- 43) 「野球と其害毒(十八) 必要ならざる運動 学習院長乃木希典氏談」(『東朝』明治44年9月15日)。
- 44) 飛田徳洲「大器押川と早稲田」(『飛田徳洲選集 第1巻』<ベースボール・マガジン社、1986年12月>) 229頁。
- 45) 飛田の経歴と評価に関しては、『野球と戦争』46頁を参照のこと。
- 46) 神田順治「解説」(『飛田徳洲選集 第3巻』<ベースボール・マガジン社、1986年12月>) 432頁。
- 47) 「お世辞に乗るな 乃木大将の警語」(『東朝』明治44年9月18日)。
- 48) 各論者の発言内容は、『野球と戦争』70-71頁、「野球問題演説会」(『東朝』明治44年9月18日)を参照のこと。なお記事「野球問題演説会」の冒頭、同演説会が満員となり盛況であったことが記されていること、しかもこの記事を野球害毒論連載中に掲載していることから、『東朝』による野球害毒論は必ずしも悪意あるキャンペーンとは言えない。

- 49) 『黄金時代』 16頁。
- 50) 『球界』 18頁。
- 51) 飛田徳洲『学生野球とはなにか』(恒文社、1978年8月) 254-268頁。
- 52) 『時事』 大正14年10月15日。
- 53) 『時事』 大正14年10月18日。
- 54) 大正14年10月27日駒沢球場で野球の早明戦が行われ、この際にも『時事』はプレーヤーボールを設置したが、同球場には電話がなく、通信手段として鳩を使用した為、予め通信が遅延したり途絶えることの了承を求めていた(『時事』 大正14年10月27日)。
- 55) 『時事』 大正14年10月16日。なお『憲章』では、「プレーヤーボール」と同機能の掲示板「プレヨグラフ」が紹介され、これは甲子園における全国中等学校優勝野球大会を伝える為に大正15年大阪の中之島公園と京都の丸山公園に設置された、としている(19頁)。
- 56) 社説「早慶野球試合 ナショナル、インスチチュウシヨン」(『時事』 大正14年10月17日)。
- 57) 「時事小観」(『時事』 大正14年10月16日夕刊)。
- 58) 「時事小観」(『時事』 大正14年10月20日夕刊)。
- 59) 『時事』(大正14年10月20日夕刊)、同(大正14年10月21日夕刊)。なおこの頃の夕刊の日付は前日付けである。
- 60) 『時事』 大正14年10月20日夕刊)。
- 61) 『時事』 大正14年10月20日)。
- 62) 『時事』 大正14年10月20日夕刊)。
- 63) 『時事』 大正14年10月21日夕刊)。
- 64) 『時事』 大正14年10月20日)。
- 65) 『時事』 大正14年10月21日夕刊)。
- 66) 「時事小観」(『時事』 大正14年10月22日夕刊)。
- 67) 前掲高嶋『帝国日本とスポーツ』 119、125頁。
- 68) 『時事』 昭和4年11月1日。
- 69) 『時事』 昭和4年11月1日。
- 70) 『時事』 昭和4年10月31日夕刊)。
- 71) 『時事』 昭和4年11月2日夕刊)。
- 72) 同上。
- 73) 『時事』 昭和4年11月2日)。
- 74) 『時事』 昭和4年11月3日夕刊)。
- 75) 菊川忠雄「スポーツの政治化と運動選手の行方」(『改造』 昭和5年12月号) 68頁。
- 76) 『憲章』 20頁。
- 77) 前掲坂上論文、13頁。また逆に、大学野球の人気によりアナウンサーは人気職業になったと評されている(小汀利得「野球経済学」<『改造』 昭和6年6月号>93頁)。
- 78) 『野球と戦争』 11-12頁。
- 79) 慶應義塾大学応援指導部史制作部会編『慶應義塾大学応援指導部 創部75年記念部史』(慶應義塾大学応援指導部三田会・創部75年記念事業実行委員会、平成20年7月) 13頁。
- 80) 『黄金時代』 72頁。この外にも『球界』では、「明治、大正と育まれてきた日本の野球は、昭和年代に入つてそのツボミが一時に開花し、ケンランたる野球絵巻をくりひろ

- げることになった」と評されている(26頁)。
- 81) 『時事』昭和6年5月16日。
- 82) 「時事小観」(『時事』昭和6年5月21日夕刊)。
- 83) 「時事小観」(『時事』昭和6年5月26日夕刊)。
- 84) 社説「野球場不詳事件の解決」(『時事』昭和6年5月22日)。
- 85) み々を生「真珠貝」(『時事』昭和6年5月28日)。
- 86) 「時事新報附録 モダン漫画特輯号」(『時事漫画』昭和6年5月31日)。
- 87) 鷺沢与四二「スポーツ救国(三) 自主的に発達す」(『時事』昭和6年5月28日)。
- 88) 鷺沢与四二「スポーツ救国(六) 入場料問題(上)」(『時事』昭和6年5月31日)。
- 89) 『野球と戦争』18—19頁、25—26頁。『憲章』41頁、47頁。
- 90) 『憲章』48—49頁。
- 91) 『時事』昭和8年10月31日。
- 92) 『時事』昭和8年11月1日夕刊。
- 93) 『時事』昭和8年10月23日夕刊。
- 94) 『時事』昭和8年10月23日。
- 95) 『外史』89頁。
- 96) 『時事』昭和8年10月23日。
- 97) 武藤山治「翌日は笑へ(早慶戦について)」(『時事』昭和8年10月24日夕刊)。
- 98) 井上友一郎(『外史』201頁)。
- 99) M・H生「円卓 早慶よ笑へ」(『時事』昭和8年10月26日)。
- 100) 「時事小観」(『時事』昭和8年10月24日夕刊)。
- 101) 「時事小観」(『時事』昭和8年10月25日夕刊)。
- 102) 「時事小観」(『時事』昭和8年10月26日夕刊)。
- 103) 「時事小観」(『時事』昭和8年10月27日夕刊)。
- 104) 「時事小観」(『時事』昭和8年10月28日夕刊)。
- 105) 『憲章』77頁。
- 106) 以上、一本勝負論とそれに対する飛田による大学野球擁護は、『憲章』78—79頁、83—84頁、飛田徳洲「大学野球の周辺」(『中央公論』昭和14年10月号)235頁を参照のこと。なお飛田は「大学野球の周辺」全6頁中、5頁弱を一本勝負論への反論に費やしている。
- 107) 前掲『飛田徳洲選集 第3巻』32頁、35頁、37—38頁。なお同選集によれば、「学生野球論」は飛田の著作『野球清談』(東海出版社、昭和15年)に所収されているとしているが、初出は不明である。
- 108) 『憲章』93頁。
- 109) 『野球と戦争』168—169頁。因みに最後の早慶戦当時慶應義塾大学野球部のブルベン・キャッチャーをしていた松尾俊治によれば、この翻訳を実際に使用することはなかった(笠原和夫・松尾俊二『学徒出陣最後の早慶戦(以下『最後の早慶戦』)』<恒文社、1981年5月>125頁)という。また慶應義塾大学応援指導部は、敵性語排撃を受け、明治末期から続いた伝統のエール「ヒップ、ヒップ、フレー」を「決起、決起、振るえ」と言い換えた(前掲『慶應義塾大学応援指導部 創部75年記念部史』19頁)、という。
- 110) 『野球と戦争』131—132頁。
- 111) 『読売報知(以下『読売』)』昭和18年10月6日夕刊。
- 112) 例えば10月15日に早稲田大学で行われた壮行会で田中穂積総長は、いざ征けと「眼

に涙さへ浮べて絶叫」した。田中は学生の生還に触れておらず、落涙により心情を吐露する外はなかったのであろう。同日法政大学でも竹内賀久治総長は、「凱旋の暁には」という表現で学生の生還に言及しているが、これも小泉同様当時においては限界であろう（いずれも『読売』昭和18年10月15日夕刊）。あるいは東京帝国大学教授穂積重遠は、学問と一旦別れても「帰還してまた続けられたい、いや、生きて帰つて……など考へるのは私の間違ひで」と述べている（『東朝』昭和18年10月2日）。つまり帝大教授でさえ、公には生還に言及することは出来なかった。

- 113) 慶應義塾大学庭球部に所属していた石井小一郎は、最後の早慶戦は「出陣前のイベントとして話題を呼んだ」と回想している（石井小一郎編著『回想 学徒出陣』＜中央公論社、1993年10月＞11頁）。
- 114) 田中の経歴は市川孝正「田中穂積、その人と業績」（『早稲田商学』第294号＜昭和57年3月＞所収）を参照のこと。市川論文は、大学行政家、学者としての田中の外に、彼の人となりや家庭人としての姿をも明らかにする力作であるが、最後の早慶戦に関しては言及していない。
- 115) 最後の早慶戦実施決定に至る経緯は『最後の早慶戦』147-152頁、『野球と戦争』154-155頁を参照のこと。
- 116) 『最後の早慶戦』124頁。
- 117) 『野球と戦争』154頁。
- 118) 小泉の経歴については、今村武雄『小泉信三伝』（文藝春秋社、昭和58年11月）、加地直紀「小泉信三の社会改造論」（『法学政治学論究』＜平成3年6月＞所収）、小松隆二「小泉信三と社会政策論—学究に踏み出した頃の泉—」（慶應義塾福澤研究センター編『近代日本研究』第9号＜1993年3月＞所収）、加地直紀「戦時期知識人の言論—小泉信三の反米論—」（『法学政治学論究』＜平成5年12月＞所収）を参照のこと。
- 119) 早稲田大学大学史資料センター・慶應義塾大学福澤研究センター編『1943年晩秋 最後の早慶戦』（教育評論社2008年11月）182頁。
- 120) 『最後の早慶戦』52頁。
- 121) 『最後の早慶戦』58-59頁。
- 122) 『最後の早慶戦』162頁。
- 123) 前掲『1943年晩秋 最後の早慶戦』132頁。